

(長岡京市) 自分ごと化会議 in 長岡京 第4回議事メモ

分科会	第4分科会
コーディネーター	石渡 秀朗
ナビゲーター	なし
説明担当者(自治体)	なし
日時	2021年 8月 7日(土) 13時 30分から16時
場所	産業文化会館1階 大会議室
その他	参加者数 <u>17名</u> 欠席者数 <u>9名</u>

総括

コーディネーター総括

- 改善提案シート中間まとめの課題ごとに、グループワークを行った。
- 「共助システムの弱体化(担い手不足)」に関しては、大人と子どものかかわりが希薄化しているという課題に対し、大人と子どもが関わる場をつくる改善策が議論された。大人は子ども目線で子どもと接し、子どももイベントの企画にかかわることが大事だと議論された。
- 「地域活動の情報発信不足」に関しては、地域での情報共有ツールは回覧板が主であり、よく見られていない現状がある。そこで、LINE等を活用し、情報に接する機会を増やし、また見ることの楽しさを付加する工夫を行うという議論が行われた。
- 「地域間の連携不足」に関しては、自治会の担い手不足、情報不足、民間団体との連携不足という課題に対し、教育・医療・福祉の専門家と一般の人たちの定期的な話し合いの場が重要であり、また、NPOと協力・連携した新しい自治会の形について議論がなされた。
- 「子育て相談の場がない」に関しては、相談窓口自体はあるのだが、それがあまり知られていない現状に対し、まずは市が民間を含めた相談窓口の情報を把握し、民間事業者へ人的・場所的・資金的なサポートを行うことが議論された。そのための連携ツールとして、SNS等で繋がりを持つ場を充実させるとともに、専門部署の設立や市民活動サポートセンターの更なる充実を図ることを議論した。

主な論点

論点① 市民活動団体の活動内容と抱えている課題について

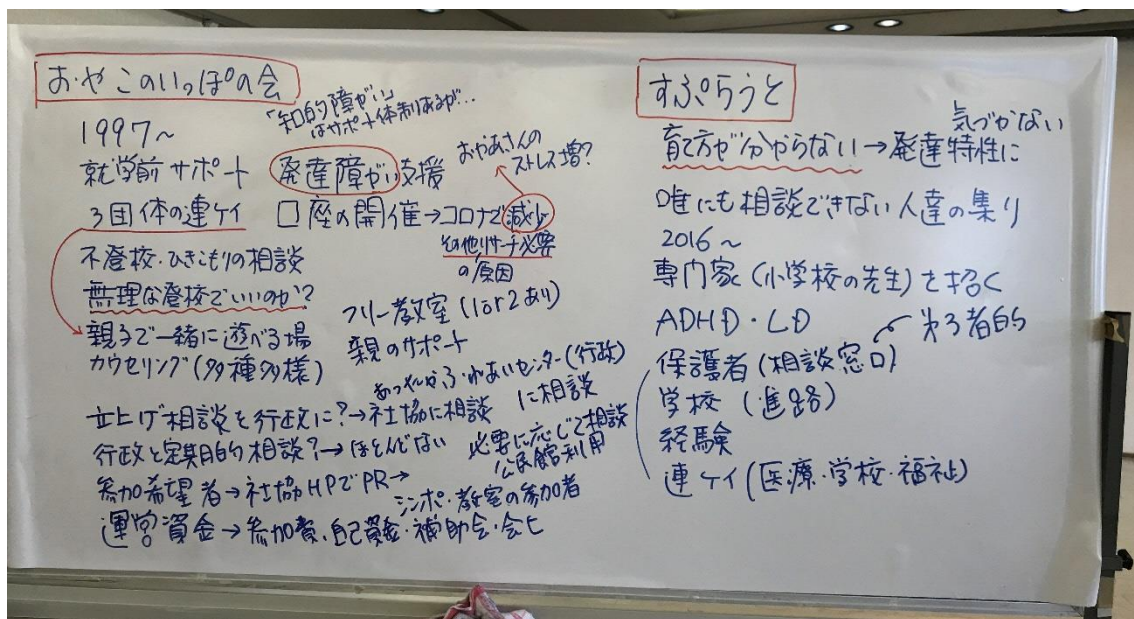
- おやこのいっぽの会
- 子どもの学びを支える親の会すぶらうと

論点② グループワーク

- 1班「共助システムの弱体化（担い手不足）」
- 2班「地域活動の情報発信不足」
- 3班「地域間の連携不足」
- 4班「子育て相談の場がない」

(各班共通テーマ：子どもの居場所がない)

ホワイトボードの写真



課題	横井さん発表	改善策	連携ツール
① 大人と子どもの関係		・コミュニティの場をつくる(なごる) ・大人は子どもの目線に ・子ども自ら計画を!	・行政の(仕事時間) ← 市民は働いている 夜の利用
② 国会 岩岸 発表 細尾	・情報は回覧板の2.2.2.2.2	・Line登録者多いの活用と ・情報と得る社会と増やそう ・集みと付加する ・民間の活動力を紹介する	・NPOの活用(単) ・市のLine → 発展の可能性
③ 国会 高橋 発表 木村	・自治会のサステナビリティ(担い手不足) ・情報不足(教育相談と保活) ・民間団体との連携	・コミュニティ協会の機能を強化 ・民間団体・PTA・学校・自治会の連携 ・特殊は子どもはいい 色々ある	・教育・医療・福祉の専門家の話し合いの場 ・新しい自治会の仕組みはNPOの協力(定期的)
④ 国会 大和田 発表 小久保	・相談窓口はあっても知らない	・市が民間を含めた窓口の把握 ・民間にサポート(補助金・公費)	・公式SNSの充実(手段) → 市民の活動の場 ・総務部専門の設立(市民サポ+サポ+センター ・活動前に市に登録 (充実)

協議の流れ

全体会

コ) 今回は市民活動団体の方から活動内容と課題等についてお話しいただいたあと、グループワークを行い、各グループの議論の内容を発表していただく。

資料にこれまでの議論の内容を課題1～5としてまとめている。この課題ごとにグループワークをしていただく。一番意見の多かった課題5「子どもの居場所がない」については、各班共通のテーマとしたい。「課題」と「改善策」、「連携のツール」について議論していただく。「連携のツール」の一例は話し合う場としてのLINEグループの活用など。最後に改善提案シートとアンケートをご提出いただき終了とする。

＜おやこのいっぽの会 ナーチャ 富岡友美さん＞

活動を始めたのは1997年。虐待防止を活動のテーマにした子育て支援を始めたのが最初。現在は就学前のお子さんご家族の支援を行う「おやこのいっぽの会」と、引きこもりや発達障がいのお子さんご家族の支援を行う「ナーチャ」で活動をしている。

「おやこのいっぽの会」では、市内で活動している3つの団体でネットワークを組んで「きりしま苑」との主催で講座を開いている。これまでは予約不要だったが、コロナの影響で予約制としており、参加数が減少している。コロナが収束すればもとに戻るのか、それともオンラインを活用して新しい子育て支援を受けられているのか、不安を抱えたまま外へ出られないのか、子育て支援が間に合っているのか否かをリサーチする必要があると思っている。

「ナーチャ」では、不登校や引きこもりのお子さんにカウンセリングをしている。決して学校に行きたくないわけではないが、朝起きると布団から出られないという子どもがいる。また、登校できているから大丈夫というわけではない。学校に行くために睡眠導入剤を飲んでいる子や、学校に行く辛さを紛らわすためにタバスコ等の香辛料を飲んでいる子もいる。不登校だから、登校できているから、というのではなく、今お子さんがどういった状況で、何が必要なのかを考えていくことが大事。また家族も大変困られている。学校に行くのが当然で、不登校は問題という価値観があるので、無理矢理学校に引っ張って行く方もおられるが、数年後そのことを大変後悔される親が多い。親の顔も見られなくなり、自分の部屋からも出られなくなる。学校に無理やり連れていくよりも、その子が安心して生きていける場所を探すほうが先だったと、親も自分を責める。

また、発達障がい、ボーダーといわれる子について、聞こえ方、見え方が違う、記憶がでないなど「みんなと違う」ことが周りに理解してもらえず、自己肯定感がなくなっていく。自身の特性を理解、サポートできるように活動している。

委) おやこのいっぽの会に来られる親御さんが何を求めているのか、どんな問題を抱えられているのかについて詳しく聞いてみたい。

富) おやこのいっぽの会は3団体でネットワークを組んでおり、ベビーダンス、英語遊び、カウンセリングとそれぞれで活動している。ベビーダンスと英語遊びに来られる方は、親子で一緒に遊べる機会を求めておられるのだと思う。元気なお母さんが子どもと一緒に活動するために来られているという印象。カウンセリングは子育ての悩み、夫婦や家族の仲、自身の成育歴の中での悩みごとなどの多種多様な相談がある。

委) フリー教室というのがある。親が自分の子どもの障がいについて認めたくないの、子どもに無理強いするということも聞いたことがあるが、親に対する働きかけはどのようにされているか。

富) フリー教室は市内で2つほどあると思う。元教師の方が学校に行けない子の学習支援をされている。また、バンビオで大学の先生とその生徒が学習支援をされている。

コ) すべて民間?

富) バンビオは市から教えてもらった情報なので、公的機関との繋がりがあるのかもしれない。

コ) 特別支援学級よりも普通学級に入りたいという親の気持ちについてはどうか。

富) 考え方は様々だが、子どもの障がいが認定された方が、就学につながりやすいとの考えで特別支援学級に入りたいと考える親もいる。また特別支援学級で繋がりを持ちたいと考える方も。ボーダーといわれる子については健常のお子さんとの違いが見えてこないの、自分の関わり方が悪いのではないかという苦労をされている。発達障がい分かってから来られることが多い。保育所や幼稚園等で馴染みにくく、居場所を求めて来られる。

<子どもの学びを支える親の会すぷらうと 木村さん>

小学校6年生と高校1年生の息子がいる。子どもが小さいときはベビーマッサージなどの教室に行き、同年代のお母さんと交流することで安心できた。子どもが幼稚園や学校に入ると、そういったところには行かなくなり、幼稚園や学校のお母さんとの関係性のなかで過ごしていく。初めての子育てなので、分からないことだらけ。幼稚園の時は、少しぼんやりしていて集団活動が苦手だと先生に言われたが、相談窓口に行く指示ではなく、就学前健診でも特に問題はなかった。小学校の勉強にはついていけていたが、黒板の文字を書くことがなかなかできなかったの、担任の先生からの助言もあり、見え方の検査をした。通級教室で検査をしたところ、発達に特性があることが分かったので、週2回通級教室でのトレーニングが始まった。小学校3年生のときに友達とトラブルがあり相手にけがをさせたが、自分の理解が足りていなかったこともあり、認めることができず相手を傷つけてしまった。学びなおす必要があると思い、同じ悩みをもつ保護者で団体を立ち上げた。自分ではどうにもできない、誰かに相談したい、話したいという思いからスタートしている。2016年に団体を立ち上げ。通級教室の担任をされていた方に専任アドバイザーとして来ていた

だき、子どもとの関わりや発達障がいについて専門的な知識を学んだ。過去2回、他団体と共同でシンポジウムを開いたところ、どこに相談してよいか分からなかったという方が多く入会してくださった。活動の内容をいろんな人に知ってもらう必要がある。

課題に感じていることは大きく4つ。「保護者」「学校」「相談」「連携」。

「保護者」について、自分の経験のみで、知識がないために子どもとの関わりがうまくいかないことがある。積極的に取りにいかなくても情報を得られる環境を作りたい。

「学校」について、幼稚園から小学校にあがる際に発達障がいがかかるケースが多い。学校で「躰がなっていない」「あの子がいたら揉める」などの理由で仲間外れになってしまう。学校の中に特別支援学級、通級があることも知らない。どういうふうに学べるか、進路の問題も知っていきたい。

「相談」について、幼稚園によって発達障がいに対しての意識・知識が違っていると感じる。躰が悪いと判断される園もあれば、理解があり、療育の場を紹介してもらえるところも。学校の先生でも理解が進んでいる方とそうでない方がいる。第3者の相談窓口が必要と感じる。

「連携」について、医療・福祉・学校の連携がうまくいっていないと感じる。医療の方から合理的配慮が必要だと言われ、そのことを学校に伝えてもうまくいかない。学校も受け入れる体制がない。横の連携がこれから進んでほしい。

PT) 団体を設立される際に市役所の担当課に相談されたのか、行政との定期的な連携の機会はあるのか、市民の方はどういったきっかけで相談・参加されるのかをお聞きしたい。

富) 行政ではなく、社会福祉協議会に相談した。当時は虐待防止が子育て支援として認知されていなかった。社会福祉協議会に伴走してもらう形で活動が続けている。そのため行政とのやり取りはあまりない。市民の方は社会福祉協議会の Facebook やチラシをみて参加されている。

木) 立ち上げの際は、あったかふれあいセンター(行政)に相談した。センターで講座も開いている。シンポジウムをするときは健康づくり推進課や、子育て支援課、障がい福祉課に案内している。また「リンク・ブック」の作成の際にヒアリングをしていただいた。ただ行政からの紹介で来られる方はいない。公民館の市民企画講座で勉強会を開いた際に参加された方が会員になることが多い。他は口コミでの参加が多い。ホームページや Facebook、Instagramなどで発信している。

委) 会場代などの活動資金はどうされているのか。

富) 内職をしながら資金を集めた。現在は京都府の補助金を申請している。2/3補助なので、残りは参加費と自身の出費で賄っている。

木) 年会費と参加費から捻出している。京都新聞の助成金の申請を考えたことがあるが、書類事務が煩雑で断念した。無料の会場を借りることでやりくりしている。

コ) 寄付金は活用されているか。

両団体) 活用していない。

コ) 司会者と発表者を各グループで決めていただき、議論をお願いする。

各グループからの発表

1 班) 大人と子どもの関わりについて話した。大人と子どもが地域住民として参加できるコミュニティをどのように作るかが課題。大人が子どもの目線になるということが重要と考えた。大人がすべてしてしまうのではなく、子どもたちに計画をさせるということが大事。そうすれば、子どもたち同士の会話、子どもと大人の会話の機会ができる。

コ) 行政の役割についてはいかがか。

1 班) 昼間に働いていると市の窓口で相談できない。夜間相談など考えてほしい。

コ) ツールを使えば解消できる可能性がある。メールであればレスポンスは遅いかもしれないが連絡はできる。

2 班) 地域活動の情報発信不足について話した。情報を積極的に得ようとする人だけでなく、情報を受動的にしか受け取らない人にも支援が必要なのではないかという問題提起があった。情報発信が回覧板のみで、それすらあまり見ない方に対しての改善点を考えた。LINE の登録者が多いので LINE で発信する。全戸配布の広報紙を見ない方に対して、広報紙にビール券やクーポン券、懸賞等を付けることで見ていただけるのではないかという案が出た。また、広報紙で市民活動団体の紹介をして認知度を上げることも大事。

自治会の運営が難しい場合は NPO 法人に運営を委託するという案が出たが、加入率が上がるのかどうか疑問も残った。

コ) 市の LINE 登録者については、ワクチン接種の関係で増えたと聞いている。ツールの一つと考えられる。コロナ以外にも様々な情報発信ツールとして発展できる。

3 班) 自治会長、子育て支援団体、NPO 支援団体、地域の方がいたので、多岐にわたる意見が出た。

自治会の持続可能性について。子ども会への参加が少なくなっている。

保護者としては、学校などとの連携や情報不足が課題。特に教育委員会との繋がりがなかなか持てない。保護者の声を伝えにくいという意見が出た。

市民活動団体の継続性についても課題。改善策として、地域コミュニティ協議会が連携できるような仕組みづくりが必要。PTA や自治会、学校などと市民活動団体との連携が取りにくい。また PTA が形骸化しており、保護者全体の意見が取り入れられなくなっている。話し合いに積極的に参加でき、やりたいことがやれるような組織になっていく必要がある。

情報については、一般の子ども、特殊な子どもと捉えるのではなく、色々な課題・悩みがあるという理解が地域に共有できればという意見が出た。

連携については、当事者と自治会や、学校、教育委員会や医療等、専門分野の方を含めた一般の人達の対話の場を定期的かつ継続して運営していただきたい。

市民活動団体の継続性について、南丹市では、自治会がもつ課題を NPO や市民活動団体に依頼して解決している。地域の方からの自治会費を専門家の活動に還元できる。長岡京市でもそういった仕組みづくりをお願いしたい。

4 班) 課題が「子育ての相談の場がない」だったが、相談の場はあるのに知られていないことが課題であるという結論になった。改善策としては、市が市民活動団体を含めた民間活動の全容把握を行うことと、市民活動団体のサポートを充実させること。サポートの内容は、場所・人材・お金の提供。例えば公共施設等の無償提供や、専門分野に詳しい市 OB の人材派遣、資金の調達方法を講習するなどが挙げられた。

連携ツールとしては、市の公式 SNS の機能を拡大して繋がりを持つ手段とする。ここで重要なことは、SNS が繋がり場なのではなく、繋がり場を持つための“手段”であるということ。そこから様々な活動の場に繋げていく。

もう一つの解決策として、市民活動と行政活動を総括するセクションを設置する。これについては既に設置されている市民活動サポートセンターの機能を充実することで対応できるのではないかという意見も出た。

連携ツールとして、市民活動団体は活動を始める前に、市の事業実施課に活動内容を登録する仕組みを作る。

コ) 次回は議論で出てきた課題とその解決策、それぞれの役割と連携についてまとめた提案書についてご議論いただく。最後に改善提案シートの記入をお願いしたい。提案書に反映する。

次回の分科会に向けた準備

次回の分科会の目標

- 次回、提案書としてまとめたものについて、ご意見をいただく。